

孫が祖父母に会いに行くだけ。

純癒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うちの次男が友人と共に過去に行った時、心底肝が冷えたしこの野郎とも少し思った。

なあ、ジエームズ？

「(長男まで逆転時計を使うなんて私は聞いていない)」

かつて魔法界を救った英雄の息子 “ ジエームズ・シリウス・ポッター ” が、過

去を——そして未来を、大きく変えようとしていた。

これは、しかしとうの本人に言わせれば、ただ孫が祖父母に会いに行っただけの物語。

※ 仮の題名につき今後変更予定有

目次

三代目悪戯仕掛け人

1

三代目悪戯仕掛け人

もし、未来が視られるなら

もし、過去を変えられるなら

どうかせめて僕等の大切な子供達だけは

どうかきつと僕等の大切な先祖達さえも

幸せになりますように、と

生きていてくれますように、と

祈らずには居られないだろう。



父親に、果ては祖父にまでよく似たくしやくしやの髪。

どうやったって直らない癖毛は、少なくともあと三代先までは受け継がれるだろう。

“ ジェームズ・シリウス・ポッター ” は、既にその事を諦めていた。

会った事も無い今は亡き祖父の写真を見て、無駄な希望は持たぬ事にした。

まるで偉大な二人の名が呪い扱いだった。

特に、当時を知る数少ない教員のマクゴナガル先生は、かの悪名高い『悪戯仕掛人』や『フレッドジョージ&リートリオ』を今でも頻繁に思い起こさせられている。

彼は本当に祖父にまでそっくりなものだから、マクゴナガル先生は余計に感傷に浸らせられるのだ。

特に悪戯仕掛人が四人で協力して行った大規模な悪戯と殆ど同じ仕組みの悪戯をされた時など、本当に家族だと彼女はいつそ感心したものだった。

加えて言うなら、ウィーズリー家の六男坊達が発売する度、ジェームズ・シリウス・ポッターに試作品を渡す事について何度フクロウ手紙に文句を綴った事か。

そんな教師をも手こずらせるジェームズ少年（16）が、失われた筈の逆転時計タイムターナーをつけて、何もせずに居るわけがない。

天地がひっくり返ったとしても、彼が目の前に出された逆転時計玩具を使わでない事はありえない。

百億歩譲って彼が『逆転時計を勝手に使うなんて』等と口したとすれば、周囲は彼の体調不良を本気で案じるだろう。

困期待通りった事に、ジエームズは体調不良ではなかった（絶好調だった）。

弟達は自分より一足先に過去に行つて恐ろ愉快しい体験なをしたらしい、自分だけがこれを使わないだなんて——ありえないね。

ジエームズは迷わずそう結論づけると、目の前の逆転時計をじつと見つめながら考えた。

これは、父が相続した此処、ブラック家の隠された地下で埃を被っていた物だ。

偽物の可能性は限り無く低い。

しかも、多分弟達が使つたような試作品ではなく、本物の。

これまでもブラック家には信じられない程高価な魔法道具が沢山見つかつてきた——我が父は相続税をどうしたんだろうか——。

地下室の一番奥の机に嚴重にかけられた魔法を丸一年苦戦して解除して開けた引き出したから出てきたのだ、信じて良いだろう（中身は逆転時計以外にも、ジエームズの予想のずつと上を行く物ばかりだった）。

……なら、どうする。

未来に行くか、過去に行くか。

どちらも捨てがたい話だ。

自分が長時間姿を眩ませば、（いくら忙しくとも今回ばかりは）親馬鹿の父がすぐさま

(どんな手を使っても) 駆けつけるだろう。

だから、両方に行っている暇は無い。

勘の良い両親の事だ、自分がこれで充分に楽しむ前に逆転時計の存在に気づいて没収していくだろうし。

どちらかに絞らねば。

未来に行くか、過去に行くか。

ジエームズがそう頭で言葉を反芻した。

未来に行くとしたら、自分の未来を見に行くか？

それとも、もつとずっと先の、例えば千年後の未来なんか面白そうじゃないか。

もしかしたら、地球が滅んでるかもしれない！ それはそれで大変愉快な話だ、とジエームズは思う。

彼は未来に希望を見出したが、いや、と頭かぶりを振った。

過去に戻ると言うのも最高にナイスなアイデアだろう。

ホグワーツ魔法魔術学校の創設者に会ってみたい気もする。彼等ほとんどでもなく偉大だとしつこい位に聞いている。

………だけど、偉大さで言うならダンブルドアだよなあ。

ジエームズが白髪で長い髭を蓄えた弟の名前の由来となった威厳たっぷりの男性を

思い出す。

キラキラと輝く蒼いあの瞳は、教科書の写真だと解つていても全てを見透かされていく気がした。

彼は魔法史の教科書に、学年が上がっても毎度何かしらの功績で載っているの（それ以外の教科にもしょっちゅう）、実際に会話をしてみたいと思わないわけではないのだ。

だが、話をして本当に全てを見透かされては困る。

未来から来たなんて知られば、どうなるのだろう。

ダンブルドアに限って悪い事にはならないだろうが、やっぱり、僕の行動を良しとほしないだろう。

それに、それだけならまだ良いが、今までにも散々頂いたマクゴナガル先生のありがたいお説教を過去に行つてまで受けたくはない。

……………そもそも、思い出せよジエームズ。

我が弟達は過去に戻つて些細な事から全てをひっくり返してしまった（らしい）。すると、僕はダンブルドア達に関わつてはならない。

残念だけど、不死鳥の騎士団辺りには絶対。

ヴォルデモートが父さんに倒されなくなつちやうかも。それつて最悪だ。

浮かれてすっかり忘れていたが、どんなに小さい事でも変えちゃならない、それが世界を滅ぼす事にもなる。

うんうん、とジエームズが腕を組んで頷いた。

元より、ジエームズはアルバスのように誰かを救う気等毛頭無い。

極論、今まで起きた事に無駄な事等一つも無いのだ。

世界が闇に覆われ、大勢の犠牲者が出た。

しかし、その者等の協力によつて、 “ 今 ” “ ” がある。

無かつた事になれ、と思う事が無いわけではない。

ジエームズも悪戯に失敗した時はよくそう思うし——正確にはその後の罰則中に——

—、それが悪い事とは思わない。

けれど、本当に無くなつてしまえば、自分がその失敗から学んだ事さえ失つてしまう。

自分の望んだように全てを動かせるわけではない。

それを彼は理解していた。

ジエームズは自分がアルバス程愚かではないと自負している。

ただ、本当にそうなら、彼は今すぐ逆転時計を父親に渡すべきだった。

渡してしまえば破壊されるのだろうけれど。

ただの観光目的だとしても、時を渡るといふ事に大きな大きな問題があると、彼は勿

論判っていた筈だ。

それなのに自分の好奇心を優先させてしまう辺りが、まだまだ子供と言われてしまう所以だった。

まあ、十六の少年に大人になれと求める者もどうかという話である。

・・・・・未来か、過去か。

ジエームズが胡座あぐらをかいたまま首をこれでもかと捻らせた。

此処に妹のリリー・ルーナ・ポッターが居れば、また何かろくでもない事を考えているのだらうと容易く想像ができた筈だらうが。

生憎それを察する人間も彼を止め（られ）る人間もこの場には居ない。

彼は自分が一度『こうする！』と決めたらなかなか撤回しない性格だ。

止めても聞かないという言葉は彼を比喻するに適している。

何十分経つただらうか。

「よし」

ジエームズは逆転時計を持って意気揚々と立ち上がった。行き先を決めたらしい。彼の声には期待が溢れていた。



1977年、ホグワーツ魔法魔術学校の七年生に在籍する五人は、複数の意味で有名な。

五人の内四人はグリフィンボール生。

一人は、特徴的な丸い眼鏡とくるんくるんの癖毛をした少年。

我らがジエームズ・ポッター。

他学年にもリリー好きで有名で、なんといつても主席（ホグワーツでは第七学年開始時に決定される）である。

低学年の頃はそうでもなかったけれど、学年が上がるにつれてハンサムになってきた事も加わり、今ではこの学校で二番目に人気な男と言っても良いだろう。

その人気さ故にジェームズに虜にされた乙女は両手両足の数では収まらないのだけれど、未だリリーの知るところではない。

……と、まあそれはどうでも良い。

いくつになろうとどんなになろうとジェームズはジェームズだ。

私の素敵な親友の一人。

何故そんなさして重要ではない事を想起していたかと言えば。

私も好き好んで彼を思い浮かべていたわけではない。

先程までは確かに私のシリウスの誕生日祝いに何をするか——二ヶ月先の事だけでなく、毎回盛大に色々やっているの今年はそろそろネタ切れなのよね、本当どうしようかしら——考えていた。

「貴方、私の親友にそっくりだわ」

思わず目の前の彼にそう告げる。

彼はまるで予期していない事が起きたかのように瞳孔を開いていた。

目の前の赤みがかった髪少年は、それを除けば紛うことなきジェームズのように。まあ眼鏡をかけていないのと、……あれ？ ジェームズよりハンサムね。

それはともかく。

私は首を傾げた。シリウス曰く、きつちり四十五度。

ジェームズ似の少年を眺める。私達の一つ下くらいだろうか。

グリフィンドールのローブを纏っている。

同級生にこれ程ジェームズに似ている少年が居ればさすがに私もその存在を認識しているだろうか、年下だろう。

そうだとしても不思議だけれど、多分転校生とかかな。

癖毛と意思の強そうな瞳、全体的な顔立ちまでもがまさにジェームズだ。

見間違える程ではないけれど、似せようとすれば後ろ姿なら騙される人は居るかも。

生き別れの兄弟と言われても納得できる。

それと、彼には何処かそれ以外にも既視感があった。

髪色だろうか？ この色はつい最近にも見た筈だ。

………いえ、もう少し濃い色だったかも。

そうだ、たしか、ああ……。

「ねえ、君、」

「思い出したわ、モリーよ！ ……あ、ごめんさい。何かしら」

私に凝視されてか少し戸惑った様子で、しかしすぐに気を取り直して少年が私に話しかけた。

遮ってしまったので謝ると、彼は大丈夫と頷いた。

それから数秒迷ってからその瞳に好奇心を乗せて私に訊ねた。

「おばあちゃんを知ってるの？」

それは随分な爆弾発言だったけれど。

私は一応一拍間を置いてから、改めて訊ね返した。

「モリー・ウィーズリー夫人の事かしら」

私の知るモリーと同じ人間なら、酷い言われようだろう。

彼女はまだ『おばあちゃん』と呼ばれる年ではない。

勿論孫も居ない。

聞き間違いではないだろう、今の私の耳はクリアだ。

最近耳鼻科に行つて検査を受けたばかりである。

なら、人違いかこの少年が何かを勘違いしているかのどちらかだろう。

或いは同姓同名が居るとか。

モリーはそれ程珍しい名前ではない。

ウィーズリーは魔法界で結構な名家だけれど、マグルになら探せば同姓等溢れる程居るかもしれない。

「そうさ。アーサー・ウィーズリーの奥さんの」

どうやらそのどれでも無いらしい。

不思議ではあるけれど、まあそんな事もあるだろう。

多分何かがズレてなんか変な感じになっているだけだろう。

もしかしたら、本当に孫かもしれないし？

私はとりあえずそれよりも、と彼に提案をした。

「知っているわ、私の友達よ。」

ところで、貴方、是非会つてほしい人が居るの」

ジェームズ二世——今勝手に決めたあだ名——にその男の名前を出すと、彼は面白そうに口を歪めた。

歪められた唇の形までジエームズを思い起こさせられるわね、と私は心中で呟いた。言うまでもなく、ジエームズ・ポッターに会ってくれと頼んだのである。

それから、そうね。

ジエームズのお父さん
フリーモントが不貞を働いたと誰かに誤解されないと良いけれど。

彼、ジエームズのお母さん
ユーフエミアにはあまり似ていないもの。

もう少しじっくり彼の顔を見れば面影くらいは見つかるかしら？



太陽のように輝き緩やかなウェーブがついた金髪に、零れ落ちそうな程大きく、深い蒼色をした垂れ目。

背は僕より少し低い。

“ スフィア・ウイヴァザリー ”、彼女は素晴らしい美人だった。

魔法史の教科書で彼女の名前は僕の父さんと同じくらい頻繁に見る。

彼女は不死鳥の騎士団の創立メンバーだった。

ハーマイオニーと一緒に純血至上主義問題に取り組んだり狼人間についての研究で大きな成果を挙げたり、学生時代には新たな呪文を多く開発し、今ではその内のいくつかがホグワーツの授業に取り入れられている。

シリウス・ブラックと仲が良かったらしく（噂では恋人だったとか）、四十年前のあの事件で彼がアズカバンに収容された時は特に心労があったらしい。

ウイヴァザリーは世界で唯一、最初から最後までシリウス・ブラックを信じ続けたという記述を教科書でも見た。

彼女は僕の時代では行方不明となっている。

まさか本物にお目にかかるとは思っていなかったな。

僕は異様に鋭い（敵意とはまた違う探るような）目つきをした男を前に、そう現実逃避した。

別に睨んでるつもりはないんだろうけど（多分）、凄く怖い。

彼の纏う雰囲気射殺されそう。

「へえ。……………で、お前誰だよ?」

何の感想だろうか。

一言呟くと、彼は僕にそう訊ねた。

品定めされているみたいだ。

余談だけど、今までに聞いた事も無いくらいの良い声だった。

同じ男でも見惚れる程美人な彼は、返答次第では僕への警戒を跳ね上げさせる気がした。

オブラートに包まずに言うと、……………あー、やっぱりいいや。

どう答えるか考えを巡らせていると(まさか本名を名乗るわけにもいかないだろう?)、僕以上に彼の機嫌か心象か何かを察したらしいウイヴァザリーから助け舟が送られた。

「シリウス……………先に私達が名乗りましょう」

その名前を聞いて、僕はああやっぱりと頷かざるをおえなかった。

だって、ホント、学校中の女子をオトしてそう。

カリスマ性が溢れ出てる。

ウイヴァザリーもだけど、すらりと長い手脚を目にした瞬間、僕は目玉が飛び出るかと思つた。

きめ細かい肌、優雅に目にかかる前髪。

いつまでだつて見ていられるような、神が創つた最高傑作つて言われても納得できそう。

つまり、うーん、この人の隣で柔らかい芝生に寝転がつてぐうすか寝てる僕の祖父と思われる人とは、ハンサムさが桁違い。

祖父を悪く言うわけじゃないけど。

涎を垂らして『リリィ……』と寝言を零す祖父は、……見たくなかつた。

僕の視線が僕よりずっとくっつきやくしゃの頭をした彼に向いた事に気がついたウイヴァザリーが、彼の鳩尾に踵落としをした。

寸分の狂いも無駄も無く急所に当てていた。

「ぐっふおっ!!?!」

情けない声と共に目を覚まさざるをえなくなつた祖父（仮）に、彼女が告げる。

「ねえジェームズ？ 貴方が今朝私達にした悪戯の落とし前を今此処でつけられるか、この少年に自己紹介をするか、どちらが良いかしら」

「やあ少年。初めまして、僕はジェームズ・ポッター。

好きなものはリリーとクイディッチ、それからそこに居る我が兄弟パッドフットとスフィアだよ！

あとはリーマスとピーターも好きだけど、今は居ないから気にしなくていい」
にっこりとした笑顔の圧力に、僕の祖父（確信）は寝ぼけ眼のまま一息で言い切った
（しかも早口）。

僕の中の祖父像がガラガラと音を立てて崩れていく。

でも、彼の瞳が。

噂以上に優秀なのだとなんとなくわかる。

食えない人なんだろうな。

「私はスフィア・ウイヴァザリー。みんな大好きハツフルパフ生よ」

「……俺はシリウス・ブラックだ。シリウスと呼んでくれ」

言外に『ブラックと呼んだら殺す』と言われたような。

綺麗な笑顔を作ったスフィアと不敵に微笑むシリウス。

二人の美形の魔性の笑みに思わずちよつと赤くなる。

シリウスがそれに気付いて少しだけ眉をひそめ、スフィアはまったくそんな事には興
味も無さそうだ。

僕は気を取り直して顔を上げた。

「僕は、……僕もジェームズ・ポッターだよ。よろしく」

差し出した手を真つ先に掴んでくれたのはシリウスだった。
それからジエームズ、スフィアとも握手する。

偽名を言おうと、当然、思った。

僕は元々この時代に来るつもりは無かったから、もう最悪オブリビエイト忘却せよでも使つて（この人達には通用するか微妙だけど）過去を変えてしまうのは最低限にしようと思つてた。

ただ――

「君、もしかして僕のファンかい？」

戯おどける祖父の眼光はあまりに冷たかった。

僕の名前を冗談だと思っているらしい。

シリウスとスフィアも友好的な顔をして、その実僕を値踏みしている。
僕と関わる価値があるかどうか。

僕が自分や仲間に危害を与える人間かどうか。

ただ——この三人にはどんな嘘もすぐに見破られる気がした。

だから、ゆるりと口元で弧を描いて正直に答えた。

「ああ！ 君達の大ファンさ!!!」
なんてったって僕は、三代目悪戯仕掛人を名乗るくらいだし。